曲 目 解 説

「ドン・ジョヴァンニ」序曲　　モーツァルト

モーツァルトは「ドンジョヴァンニ」で、珍らしくオペラの中の曲を序曲に取り入れている。この曲の前奏部分はドンジョヴァンニが自ら殺した騎士長の亡霊によって地獄へつれ去られる場面の音楽であるが、それにしても恐しい曲である。観客を劇の世界に引きずり込む為に、その冒頭にこの曲を用いたことは、モーツァルトがこの「ふしぎだらな内容のオペラ」（ベートーヴェン）を歓楽と絶望の二つの極をもつ人間劇として描こうとした為であろう。それは誰でも感じたことがある「享楽の中に存在する不安」である。

後半のモルトアレグロはこの序曲の為に作られた曲。モーツァルトはポンチに酔いつつ女房の「アラビアンナイト」の物語に大笑いしながら、一晩で書き上げたという逸話が残っているが、それが信じられるような、彼の笑い声が聞こえてくるような楽しい曲である。しかし演奏者は笑えない。嗤(わら)うのは聴衆の役柄である。

ハイドンの主題による変奏曲　　ブラームス

この曲はブラームスの有名なる習作である。こう書くと異議を唱える方もあるかもしれない。「ブラームスは変奏曲の名人」という意見には私は賛同できない。いったいどこを取って言っているのだろうか。ブラームスの音楽とは、自己の主張やファンタジーのおもむくままに形式というものを変形し、あるいは無視するというあの「ロマン主義」の中にこそ本質を見出すものであろう。例えば、これも有名な「パガニーニ変奏曲Op.35」や「ヘンデル変奏曲 Op.24」といったピアノ曲も、自由な形式で書かれた後期のOp.116以降の作品と比べると著るしく魅力に乏しいものと言わざるをえない。ブラームスの音楽は変奏ごとに音楽が途絶えてしまう変奏曲には不向きであり、主題が止めどなくメタモルフォーゼしてゆくソナタ形式（それも自由な形式による）に向いている。その答えは３年後（1876年）の第一交響曲で明らかにされる。

しかし、この曲はブラームスの管弦楽曲としては画期的なものである。ここでブラームスは自分の音楽を、ピアノではなく、管弦楽で表現するための語法を見出しているからである。厚く重く響くトゥッティ、ホルン、ファゴット、ヴィオラといった中低音楽器の多用、弦の粘りあるアルペジオ、いくつかの楽器の異なった旋律の集合体としてのテーマ、それらのものが、主題と８つの変奏曲の中に見えかくれする。あきらかに、シューマン以前には誰も用いなかった様式であり、またあきらかに、ワーグナー以降の管弦楽法である。さらに、第四交響の終楽章の雛型を見るような終曲パッサカリア。この長さではいかにも中途半端ではあるが、ここで彼は、変奏曲による音楽表現の自分に最もふさわしい形式をも見出している。

今日、この曲があるていどのポピュラリティーを持っているのはそのレコードの多さである。いま日本で少なくとも27種類もの演奏を楽しむことができるが、これらはほとんど交響曲の余白を埋めるだけの、いわば継子あつかいである。曲の内容のせいもあるが、いずれも似たり寄ったりで、抽(ぬき)んでて優れた演奏はない。その中で我々の演奏がはたして28番目の存在価値を持つか、それは皆さんの耳におまかせする。

（S.H）

レクイエム **モーツァルト**

《レクイエム》はミサの中で特に死者のためにとり行なわれるミサを意味するが、ミサとは新約聖書の福音書の記事よりキリストが受難の前日パンとブドウ酒の杯をとって「これは世の罪を負って十字架上に死んで神の前にあがなわれるための私のさかれる肉であり流す血である。再び神の国で共に食事ができる日までこれを記念しとり行なえ」という意味の言葉を云われたことに発するものである。死者のために行なわれるミサは、この教理に聖徒のまじわりの教理が付加される。それはひとりの聖徒の善行とその者による他の聖徒のためにささげられる祈りは、生きている聖徒のみならず最後の審判まで墓に眠る眠れる聖徒たちにまで功が及ぶとの教理である。そして教会は最後の日までこの定められたミサを続けて行くのである。一方、ミサのために定められた特定の式文、典礼文というものがあり、通常のミサに用いられる「通常文」（1.キリエ、2.グローリア、3.クレード、4.サンクトゥス（ベネディクトゥスを含む）、5.アニュス・ディ）と、それぞれの目的によって変更される特別なミサのための「固有文」とが区別され、死者のためのミサ（レクイエム）では通常文のグローリアとクレードが省略され、始めの入祭文〝レクイエム・エテルナム：永遠の安息を……〟他が加えられる。

作曲の経緯については物語りが伝えられる。1791年7月オペラ「魔笛」の完成が近づいたある日すでに健康状態をわるくしていたモーツァルトの前にうすきみ悪い「鼠色の服を着た、背の高いやせほそった見知らぬ男」が無署名の作曲依頼状をたずさえて現われたと云う。後に判明したことでは素人音楽愛好家の伯爵が自分の妻の命日に自分の作品として発表しようとたくらんで名をふせたまま使いの者にモーツァルトのもとへ作曲依頼をもたせたという話である。しかし、依頼を受けたモーツァルトにとっては、はかばかしくない自分の健康状態と生計状態のため非常なショックを受け、あたかも地獄からの使者が自分を迎えに来たかのごとき幻想にかられ、「自らのための白鳥の歌であり、完成させずにはおけない」との手紙を書いているとも伝えられている。しかし彼自身この作品を完成することなくその生涯を終えてしまったのである。未完の部分は残されたスケッチと口伝により弟子のジェースマイヤーによって完成され現在の形で存在している。モーツァルト自身が書いた部分は以下のごとくである。

入祭文とそれに続くキリエによる第1曲、その後の続誦としての第2曲から第6曲までのすべて。そして第7曲「ラクリモーサ」の第8小節までと、奉献唱の第1～2部にあたる第8曲「ドミネイエズ」と第9曲「ホスティアス」のほぼ充分なスケッチである。

《レクイエム》の残りの部分の仕上げを指示されたジェースマイヤーの作業は高く評価されてよいものであろう。モーツァルト自身が完成させればこうはしなかったであろうという部分も形式的にも管弦楽的にもとりざたされるが、あくまでも推測にすぎず、その意味からも決して原型を傷つけることをしなかったこの弟子のおかげで現在我々はこの感銘深い作品に接することが可能となった。

（N.K）